使徒言行録 19 章 11－20 節

「主イエスの名」

　パウロは主の言葉に伴って、「目覚ましい奇跡を行なわれた」と書かれています。12 節に、それが具体的にどのような様子だったかが記されています。ここで重要なのは、これらの御業を行なわれるのは「神ご自身である」ということです。パウロが不思議な力を持っていたという訳ではありません。パウロは神のご支配に、自分を委ねています。その中で、神はパウロの手を用いてご自分の力を表して下さり、これらの奇跡の業を行なわれたのです。パウロが誇ったのだとすれば、それは自分自身ではなく、自分を救って下さった主イエスの名を誇ったのです。

　さて、そのようにパウロの手を通して、神が目覚ましい奇跡を行なわれていることを、見たか聞いた、各地を巡り歩くユダヤ人の祈祷師たちがいました。この祈祷師たちは、パウロがしていることを見て、13 節のように行いました。すると、祈祷師たちはどうだったでしょうか。彼らは逆に悪霊に問い返されます。パウロと祈祷師たちの大きな違いは、主イエスとの関係であると言えるでしょう。それは、「お前は何者だ」と問われた時に、自分が何者であると名乗るか、ということに繋がります。パウロは主イエスを信じ、服従し、心から信頼しています。自分を罪から救って下さった方、自分に新しい命を与えて下さった方です。この方に生かされている。この方に立たされている。そうして主イエスに仕え、主の言葉を宣べ伝えているパウロです。しかし、祈祷師たちは、主イエスを信じるどころか、試しにイエスの名を使ってやろう、と考えました。信じることもせず、自分たちのために、神の御子である主イエスご自身を利用しようとしたのです。祈祷師たちがしようとしたことは、神に従うどころか、「イエスの名」を利用し、神の力を自分のものにし、神を従わせようとする行為でした。

　わたしたちは祈祷師たちのようにもなりかねません。神の力を、自分の望みを達成するために求めたり、自分の都合の良いように神が動いて下さることを求めているかも知れません。わたしたちは、何でも神に求めて良いし、神に願って良いのです。しかしそれは、自分の思い通りになることではありません。自分自身がただ神にのみ生かされ、養われ、導かれていると信じ、その神に自分を委ねることによって、神がわたしに求めておられることを、わたしも願い求めていくことなのです。主イエスを信じる者は、「主イエスの名」を持っています。それは、主イエスが共にいて下さるということです。復活の主イエスが共にいて下さり、共に歩んで下さり、罪にも、悪にも、死にも、すべてに勝利し、すべてを支配しておられるその力で、守って下さるのです。わたしたちは、ただこのお方だけを主人として従い、他の一切を捨てて、「わたしはイエス・キリストの僕です」「わたしはイエス・キリストのものです」「イエス・キリストはわたしと共におられます」と言うことが出来るのです。

　その真の支配者が共にいて下さるなら、わたしたちは何も恐れなくて良いし、目に見えるものにも、他の何ものにも頼らなくて良いのです。神の恵みのご支配の中で、何があっても、どんな時でも、主イエスが共にいて下さる慰めと平安の中で、神の力に支えられて、生きていくことが出来るのです。